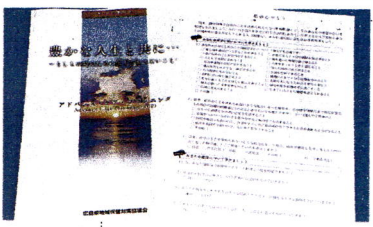
終末期「心づもり」医師と

広島県地対協が取り組み

「もしものときのこと」を医師と患者、家族が話し合うアドバンス・ケア・プランニング（ACP）の試みを、広島県医師会と広島大、広島県、広島市でつくる広島県地域保健対策協議会（地対協）がスタートさせる。終末期に自己決定能力がなくなったときにも、患者の意思に沿った医療を実現するのが狙いで、県全体でACPに取り組むのは全国でも他に例がない。2月に作成したチェックシート「私の心づもり」を活用して、ACPを広げていく。

ACPの主な対象は、かかりつけの医療機関に継続して通院している高齢の患者。自分自身で自分のことを決められなくなったときに備えて、医師に希望や思いを伝えてもらう。



広島県地域保健対策協議会が作成した「ACPの手引き」と「私の心づもり」

そのときに活用する「私の心づもり」はA4判、2ページ。病気が悪化した場合の治療の目標や療養の場所、延命治療を希望するかどうか、自分の代わりに意思決定してくれる人がいるかどうかなどを尋ねる12項目があり、医師と語り合うきっかけにする。

県地対協は昨年6月、本家好文・広島県緩和ケア支援センター長を委員長とする「終末期医療のあり方検討特別委員会」を設置。カナダ・アルバータ州の試みを参考に議論を重ね、ACPについて市民にやさしく説明する「手引き」と「私の心づもり」をそれぞれ8500部作製した。医師会員に配布するほか、新年度は積極的に活用するモデル地区の設置も検討している。

「ACPの手引き」と「私の心づもり」は3日午前11時以降、県地対協のホームページ（http://citaiky o.jp/）からダウンロードできる。（平井敦子）

対話重ね希望伝える

（解説）

もしものときの希望を伝えるのなら、エンディングノートや、終末期の医療の要望を表明する日本尊厳死協会の書面「リビング・ウイル」を思い浮かべる人も多いだろう。しかし、広島県地対協が始めるACPが画期的なのは、希望を語り合う相手がいること。そしてその相手が、かかりつけ医師である点である。

希望は、伝えて初めて実現する。また、自分をよく知る医師の助言を得て、より現実的な将来を描くことができる。ACPは望む最晩年を送るため、実効性の高い方策といえる。

試みの背景には、医療の進歩と高齢化がある。さまざまな延命治療が可能となり、長く生きることができるようになった半面、認知症の発症や病状の進行によって、終末期の治療について自分で意思決定できないケースが多くなっている。

日本人の平均寿命（2012年）は男性79・94歳、女性86・41歳。長い老年期に医療との関わりは切っても切り離せない。どう付き合うかを考えなければ、患者や家族の思いと懸け離れた高度医療のレールに乗ってしまう可能性もある。

ACPは、高齢社会を納得して歩むための鍵を握る試みといえる。多忙な医師が患者と語り合う時間をどう設けるのかなど課題はあるが、医師、患者、家族が意義を共有し、新たな一歩を踏み出したい。（平井敦子）

長い老後 納得して歩む鍵